

に留守した。元和二年家老となり、寛永元年父永福卒して遺知の内三千三百石を配分せられ、尙前後の賞賜を加へて一萬四千四百五拾石を受け、その内百五拾石を興力知とした。八年人持組頭に進み家老に任じ、二十年請うて退老し、一萬四百五十石を嫡孫庸禮に、その餘二千石を次子又十郎易真、千石を義子權之助正富に、千石を外姪多賀豫一右衛門直辰に分ち、先に歿した長子和忠が別に受けた千石を易英の隠居料としたが、同年十二月廿一日享年七十三で歿。法號を放光院傑心自英居士といひ、野田山に葬られた。

**オクムラヤスヒロ** 奥村庸禮 初名和豊。通稱多宮、因幡・壹岐。主殿和忠の子。寛永四年十一月七日生。十四年十一歳の時前田光高に仕へて侍臣となり、二十年十七歳の時祖父易英の後を襲いで一萬四百五十石（内百五十石興力知）を受けた。承應元年家老となり、萬治三年人持組頭に進み、寛文九年二千石を加賜せられ、併せて一萬二千四百五十石（内百五十石興力知）となり、貞享三年大寄に陞り、四年六月八日歿した。年六十一。遺訓に依り、儒禮を以て葬り、別に敬齋齋師儉居士と諡した。庸禮一名は克、字は師儉、顯思又は蒙窩と號し、天資憤懣、才力一時に高く、宋儒性理の學に志し、幕府の學士林蕙・木下貞幹を師友とし、水戸の客儒朱舜水に師事すること多年。その師を尊ぶの禮、他人の企及する所でなかつた。庸禮の藩侯に從ひて江戸に于役するや、舜水に會うてその説を聞き、國に在りては則ち書簡を通じ、疑義する所の經書及び通鑑に就いてその教を請ふを常とした。舜水亦鞭撻懲辱至らざる所なく、その

庸禮に與へたる書十編、答書十二編、啓一編は、舜水文集に載せてある。庸禮天和二年を以て、讀書拔尤錄二卷を著して上木したが、一篇の綱領實に誠と敬とにあつた。また別業あつてこゝに遊息し、舜水爲に徳始堂及び敬齋の記を作つた。

**オクムラユキヒデ** 奥村征英 通稱小善・中務。前田兵部の子で奥村平馬に養はれたもの。祿二千六百五十石（内千石興力知）。小松御城番勤務中安永八年四月四日出奔し、五月大坂で召捕へられて一門御預となり、九年四月四日能登島に流し、俸十五人扶持を賜ふべき旨命があり、八月廿二日その地に赴いた。時に四十四歳。天明六年七月十二日配所御免、文化六年四月九日七十三歳を以て歿。子獲馬敏徳、享和二年特に祖父平馬の遺跡として千石を受けた。

**オクムラユミト** 奥村弓人 初名虎之助。六三郎昌義の子。天保十二年閏正月新番に列し、十三年七月父の遺知百石を襲いだ。前田慶寧の世嗣であつた時之が近習となり、嘉永元年十一月十八日その江戸下邸に遊んだ時、弓人命を受けて白鳥を三四十間の遠きに射、大にその賞辭を得た。

**オクムラヨシアキ** 奥村榮隆 加賀藩の老臣奥村氏宗家の第九代。修古の嫡男。延享元年出生。母は前田對馬守孝資の女。幼名豊次郎、後助右衛門。寶曆四年三月廿二日遺知一萬七千石（内千五百石興力知）を襲ぎ、明和元年十二月廿九日享年二十を以て歿。法號寛廣院仁甫道賢居士。野田山に葬られた。

**オクムラヨリチカ** 奥村自邇 奥村時成の四男。有輝の弟。通稱彌四郎、織部。元祿十四

年七月四日故時成の知行餘分を以て、二千五百石（五百石興力知）を賜はり、人持組に加へられ、十年十二月廿五日加増五百石を拜領し、十三年九月七日江戸に於いて若年寄を命ぜられ、十四年八月廿八日四十七歳を以て歿した。

**オクムラリユウオン** 奥村龍音 羽咋郡元女眞宗東派本乘寺の僧。高倉學寮に學んで寮司に進み、明治十九年九月十九日歿、六十九歳。法名覺壽院。

**オクヤマ** 奥山 江沼郡の南部、鞍掛山から大日山・富士寫岳に渡る一帯、動橋・山中二川の上流地方を總稱して奥山といふ。

**オクヤママタ** 奥山方 江沼郡で藩政時代に山中・下谷・菅谷・栢野・風谷・大内・枯淵・我谷・片谷・坂下・小杉・生水・九谷・市谷・西住・杉・水・上新保・大土・今立・荒谷・眞砂の廿一ヶ村を含む總稱であつた。この郡では古來の郷庄名を失つたので假に名づけたものである。

**オクヨシダ** 奥吉田 鹿島郡豊田保に屬する部落。

**オクヨシダシ** 奥吉田新 鹿島郡豊田保に屬する部落。

**オクラヤマ** 御藏山 石川郡林郷月橋嶺に在る山。越登烈三州志古墟考に、こゝは富樫政親の糧米を貯へた所で、その代官槻橋彌四郎が之に居たとある。古跡考にはそれを彌次郎とする。政親の米廩であつたとの説は不明であるが、彌四郎は長享二年高尾落城の際自及した中にも彌次郎とあるから、それが正しからう。

**オコガハ** 於古川 源を鹿島郡西馬場の古谷に發し、羽咋郡上棚小字上棚出の北方に於

いて、上中山に發する一支流を合はせ上棚川といひ、又二所宮小字雨谷にて、源を安津見小字坪・谷内に發する矢駄川を併せ、高濱の北方に至つて米町川に合してゐる。流程一二軒。於古川の流域は土地低く、一朝降雨に際する時は沼澤の狀を呈し、殊にその流末米町川の水勢急なるため排出を妨げられたから、元治・慶應の交際に大念寺から新河床を開鑿通水させたこともあるが、工事の完全でなかつた爲に埋没し、僅かに痕跡を留めるのみとなつてゐた。因つて明治三十六年六月於古川水害豫防組合を組織し、大正四年五月を以て高濱のゴゼの下から矢駄の樋川橋に至る四軒五の改修を竣つた。

**オコシカヘシ** 起返 享保年間檢地引高の事に就いて詮議があり、たとへ川流・山崩があるとも、絶対に復活の見込なき田地の外容易に引高を行はぬ方針とし、一時の荒廢には村高の減少を認めず、再び耕作し得るまで地價米を下附し、村民をしてその開拓に従事せしめた。このことを起返といふ。變地の起返については、新田裁許役が専ら之を鞭撻するの任に當り、改作奉行が監督した。

**オコシノミヤ** おこしの宮 ↓オウゴノミヤジンジャ 擁護宮神社。

**オコシバタケ** 御腰畑 石川郡菅波の東方村端の總稱である。加越能舊跡緒に「菅浪領の内、御腰と申所有之候。昔蓮如上人此所に寺建立可申とて地取を致され候。上人暫く腰を掛申され候故、その所を御こしと申傳ふ」とある。

**オコジヨ** おこじよ 白山の山麓から舊木帯に至る間に棲息する動物。一にヤマイタチ